

# 豫科練

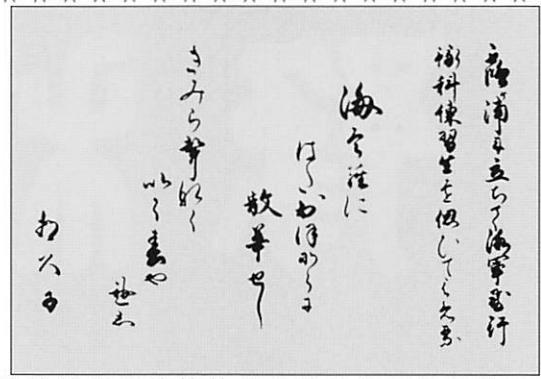


No.461 令和2年

11・12月号

○連載《シリーズ海軍及び予科練各種記念碑・慰靈碑》No.3	2
○連載《シリーズ海軍飛行予科練習生遺稿》	3
○三四三空隊史③	4
○ご縁	8
○青春の日々	13
○私の昭和史③	18
○寄付者芳名簿	23

公財団法人 益海原会



海軍及び予科練各種記念碑・慰靈碑 予科練の碑 No.3



この御歌は、高松宮喜久子妃殿下の御直筆で、有栖川流と申しあげ、妃殿下はその御宗家にあたられると承ります。

はたおほそらに  
散華せし  
きみら声なく  
いく春やへし

霞ヶ浦に立ちて海軍飛行  
予科練習生を偲びてよめる  
高松宮妃殿下御歌

高麗浦に立てて海軍を行  
術科練習生を創してくわう

戦後航空隊時の射撃場跡地に現在、「写真の慰靈碑」が在隊生存者等の浄財で建立され、五月末の日曜日に慰靈祭が行われている。

三重空には前述した各期以外に20期の一部も土空から転隊して、乙飛では21期～24期迄の練習生と、丙飛15期、特乙飛では3～5期までが、又、予備学生では13・14期生達と一部甲飛の練習生達も教育期間の長短は別として三重空並びに分遣隊で教育された。

予科練発祥の教育航空隊、横須賀空が手狭になり土浦空に移転して、拡充を図った筈の予科練教育隊も、極東に暗雲が立ち始めた昭和12年頃には、搭乗員の拡充が求められて土浦空に匹敵する航空隊の設置が急がれて、三重県香良洲町に40万坪の用地を買収して、第2の予科練航空隊を創設して、昭和17年8月1日に開隊され、土空に在隊中の甲10期、乙16・17期（岩国）・18期生が転隊して、その開隊記念式典に花を添えた。昭和17年末迄に最初から三重空に入隊したのは、甲11期乙19期の約半数の練習生が入隊した。「東の土空・西の三重空」と言われて、予科練教育の両横綱とされ、甲は土空乙は三重空と教育も分断させての思惑から創設されたが、戦況の悪化に伴つて予断を許さず混合されて、予科練のみで無く予備学生・生徒等の搭乗員教育の根幹が両隊に求められて、基礎教育が施された。

# 海軍飛行豫練習科

## 遺稿 遺詠 遺書 詞世

書簡

(弟あて)

六〇一空所属  
海軍一等飛行兵曹

今井

勲

十八歳  
千葉県

第十二期甲種飛行予科練習生

雄夫、いよいよ暑くなつたね。お前もこの位の暑さには負けず、大いに勉強している

ことと信ずる。

戦争には休みはない。お前の勉強にも、休みがあつてはならぬ。

勿論、俺も勉強している。幾度もいうのであるが、父母の意にそつとうに、一生懸命にやれ。

昭和二十年八月十三日金華山沖に来襲の敵機動部隊攻撃に、神風特別攻撃隊第四御楯隊として、彗星艦爆に爆装50番を抱き、一三〇〇百里原基地を発進して、敵艦船に突入戦死す。

# 三四三空隊史(3)

志賀 淑雄 飛行長

ここに初代隊長すべてを失う。正に死闘の連続であった。

かくて隊長は新に着任した天誅組光本大尉一人となつたが山田、松村、市村各分隊長は編成以来の歴戦であり、老練磯崎分隊長、新鋭速水、服部分隊長を加えて意気ますます軒高であった。

一方、乏しい器材燃料を駆使して古賀整備主任の下で品川、成松、辻野、小林各整備分隊長、二宮兵器分隊長以下地上各隊員の一人一人がそれぞれ分散隔離された壕、掩体あるいは露天引込線のなかで、情報等も充分に伝えられないままの姿で不撓不屈の努力を続けていた。

この姿は、一月松山における

初編成以来、五月大村で新副長相良中佐、新天誅組隊長林啓次郎大尉以下を迎えての背水の布陣への再編、そして今や鶴渕大尉以下初代三隊長を失い、窮まり行く戦況に向つて正に最後の

力を振り絞らうとする第二の再編の姿でもあつた。

八月八日、戦爆連合約二百余

機が天草上空から侵入して来た。邀え撃つ紫電改は光本隊長を指揮官とする二十四機。しかも一連の被爆の後で今までのようなく離陸はできなくなつていた。

○七三〇光本中隊(四〇七)、続いて二中隊(三〇一)が発進し、やや遅れて三中隊(七〇一)も発進して有明湾上空に向つた。遭遇した敵の第一群はB-24十二機編隊の四梯団と、それを掩護するP-47、P-51合わせて約四十機と報告された。

第一撃以降乱戦となり、有明

湾上空から久留米へ、そこからされた壕、掩体あるいは露天引込線のなかで、情報等も充分に伝えられないままの姿で不撓不屈の努力を続けていた。

歴戦石塚光夫少尉も未帰還のまま終戦を迎えたなかの一人であるが、その奮闘の姿は地上から目撃され、感激した地元の人達が三加和町(熊本県益城郡)山中に自爆機を捜索された様子が、戦後戦友の努力によつて解明されている。

久多見上飛曹は空戦中エンジンに被弾、落下傘降下中P-47四機の銃弾で戦死し、その四番機西本二飛曹は福岡市味方村の水田中に自爆、久世二飛曹は福岡上空で終に被弾して飯塚市鯰田炭鉱に自爆している。田浦、番機西本二飛曹は福岡市味方村の水田中に自爆、久世二飛曹は福岡上空で終に被弾して飯塚市鯰田炭鉱に自爆している。田浦、

第一撃以降乱戦となり、有明湾上空から久留米へ、そこから福岡及び築城方面へと敵を追つて分散北上する形となり、北九州に向つた我が一群はそこで別のB-29とこれを掩護するP-47、P-51にも会敵している。

○八五〇離陸した須崎重雄上二機と空戦し自爆している。飛曹は、一〇〇〇太宰府上空に飛曹は、一〇〇〇太宰府上空に後発の三中隊横堀上飛曹は最後に築城基地上空でP-51十機と空戦し自爆している。

後発の三中隊横堀上飛曹は最後に築城基地上空でP-51十機と空戦し自爆している。

軍から通報され、司令から二階級特進を上申された。

三中隊油田二飛曹は有明海上でB-24を一機撃墜したが、单機となつたため大村に向う途上多々良上空でP-47型三機と空戦し被弾落下傘降下した。

地上で飛行長は敵の降下と見て直ちに捜索捕獲を指令したが、山上指揮所の相生副長から「味方だよ」との電話があつた。「いや敵だよ」と思いつめていた飛行長の所に「重症でした」(間もなく死亡)と帰隊報告を受けた時、名状し難い感慨の裡に「何年経つても先輩には叶わないな」という溜息があつた。

一中隊服部大尉は福岡上空でB-29を攻撃中に被弾、重症のまま白木村山中に降下したところを救助されて陸軍病院に収容された。

隻腕を失つたまま意識不明を続けていたが、八月十六日になつて通報を受けた大村基地から中島少尉が、翌日野村軍医長が収容に向い、十九日嬉野海軍病院に移して帰隊した。

敵の攻撃は九州全域に及んだ。

殊に北九州に来襲したB-29は支那大陸からのものと考えられる情勢であった。

## 七、終戦

八月九日、燃料機材共に乏しく、飛行長、隊長、分隊長は搭乗員と一緒に大村の裏山に登山することになった。

山腹で誰かが「落下傘！」と叫んで指さす方向、大村湾を距てた山の向うに突然頬に温味を感じるかの巨大な闪光に統いて、ムクムクと雲を突いて上昇するキノコを見る。

広島被爆の電信情報から異口同音に原爆と判断して下山を急いだ。肌に感する事態は正に重大であった。

いずれ空母群に一撃をと、飛行長指揮の下に給飛行訓練を実施し、その間八月十二日長崎上空の邀撃で大塩大尉を失ったのを最後として八月十五日終戦の大詔を挙げ、万事ここに窮つた。如何なる事態にも泰然として司令を補佐された相生副長は、この日たまたま松山基地に到着の寸前であった。司令は十六日、

紫電改を駆つて五航艦司令部へ飛ばれ、松村大尉、本田飛曹長、下鶴上飛曹が掩護隨行した。

司令はさらに横空に、そして松山を経て十九日大村に帰着された。その間飛行長は秘かに拳銃に実弾を装填して留守をあずかつたが、一同整々と待機していた。

十九日、切々たる司令訓示の後、五航艦隊司令部の指示に従つて血氣旺んな搭乗員、現役隊員から大村を離れることになり、主計長、鈴木副官外の要員を残して全員それなりに万感を残して逐次散つていった。

その後ラジオ放送によつて飛行長以下若干名が着隊し、三五二空司令山田竜人中佐の下に進駐軍との折衝引渡しに当たり、九月末米軍の指示によつて近藤若重整備兵曹外の整備により飛行長、小野正盛、的場三郎、原田秀夫等が試飛行を行い、紫電改三機を横須賀に空輸した。

この三機は米国に移されて今日に至つてゐる。

戦後三十五年を経て綴る隊史に間違いがあつてはならないと、いふ観点から、防衛庁戦史室に存された「戦死病歿行方不明者事務進捗綴」に記載された記録を基にして、事実に添つて八ヶ月間の動静を連ね、要約したもののが本稿である。

靖国の社殿に祀られる英靈に序列はなく、水の如く平等であることを思い、加えて敗戦、銃後の慘を考えると、隊史も個人名抜きで詳述出来ればと念じたのであるが、前述の次第で個人名を連ねることとなつた。がこれは、その人だけを顕彰するのではなく、山の話をする時尾根の名、谷の名を連ねて語るように話のなかの一つの道標として考えていただきたい。

構成上、記述に濃淡が出来たことも否めない。戦闘の模様については、旗色必ずしも振わず終戦に近づいた頃については、當時の混亂等を意識して特に濃くしたことをお断りしておく。

各科員の誠にきめ細かい連日の努力は言語に絶するものがあつた。その撓まぬ健闘があつてこれが出来たのであるが、そのことが出来たのであるが、そのことが充分に表現しえなかつたことをお詫びする次第である。

総撃墜数百七拾余機に及んだ赫々たる戦果の裏に多数の殉職、地上戦死及び病死者を出したことは別表の通りであるが、その都度看護し処理し、遺体遺骨の処理をした医務科、主計科、さらに戦後も複雑な事務処理を完済し貴重な資料を残した副官部の実績をここにお伝えする次第である。

次に戦闘について一言補足させていただく。

鴨淵、林、菅野初代隊長によつて実施された美事な編隊戦闘は、これに続いた老若搭乗員のひたむきな闘志によつて完成されたものであり、後を受けた林啓次郎隊長、光本卓雄隊長もいづれ劣らぬ名隊長であつたし、分隊長、分隊士、各搭乗員ともにそれぞれ一機当千の闘志に燃えていたことを想起する。それ

は三四三空だけでなく各隊とも同様であった。

そのことは同時に、空に一身を捧げた海軍戦闘機搭乗員のなかで、たまたま最後の機会に二十耗四挺の紫電改で戦う機会を与えたことに対して、我々隊員一同心から敬虔な態度で感謝することを忘れてはならない。

紫電改もまた一日で出来たものではない。これを搖籃した海軍関係の用兵、技術の各先輩に感謝するとともに、隊員一同あるいは足らざりしを憂えつつ、最後に、戦死者ならびに銃後にあって被弾その他により悲惨な昇天をされた方々に対し、心からなる黙禱を捧げる。

## 部隊編成・配備経過

### 並びに主要戦闘経過

#### 一 部隊編成経過

一九・一二・二五 編成。三航艦に編入。戦闘三〇一、四〇七、七〇一の三ヶ飛行隊

二〇・二・一 偵四増隊

二〇・二・一〇 戦闘四〇一、四〇一増隊

二〇・三・一 戦闘四〇二減隊  
二〇・四・一 五航艦に編入  
二〇・六・一 七二航戦に編入

二〇・七、七〇一を率い大村に転進。戦闘四〇一を松山に復し、これを訓練・補給基地とする。  
二〇・八・一五 終戦の大詔を拝す

二〇・八・一九 待機を止め兵器を還納

#### 二 部隊配備経過

十九・一二・二五 松山基地にて編成 (戦闘四〇七のみ即日出水基地派遣)

二〇・一・五 戦闘四〇七出水

より松山に合同

二〇・三・一 戦闘四〇一徳島基地派遣発令

二〇・四・四 司令部の一部を率い鹿屋進出

二〇・四・一〇 戦闘三〇一鹿屋進出

二〇・四・一三 戦闘四〇七鹿屋進出

二〇・四・一四 戦闘七〇一鹿屋進出

二〇・四・一七 戦闘三〇一、四〇七、七〇一の主力を率い第一国分基地に転進

二〇・四・二五 戦闘三〇一、四〇七、七〇一松山基地復帰

二〇・四・三〇 戦闘三〇一、

#### 三 部隊戦闘経過

##### イ 一般経過

制空権獲得による戦局打開の特殊部隊として二〇年初頭に編成を終わり、五月進出を中途として四国松山基地において、内海西部の防空をかね訓練中のところ、三月十九日、敵機動部隊が内海西部に攻撃しきたるを邀撃、五〇数機を撃墜するという戦果を収めた。

続いて銳意訓練中であったが、三月末敵は沖縄に侵攻、戦局もはや予定の訓練統行を許さぬ事態となり、各隊とも練度半ばのまま、四月上旬から逐次鹿屋に進出、南西諸島方面の制空に任じた。喜界島付近上空にF6F、F4Uを捕捉し、激闘数次にお

よびかなりの戦果を収めたが、鹿屋の基地設備不良のため地上で飛行機隊を危殆にさらすことしばしばであったので、四月中旬第一国分基地に転進し、任務を続行した。

この頃、マリアナ基地より南九州に対する大型機の来襲漸く頻繁化し、その効果軽視できぬ状勢に至ったので、四月末再度基地を大村に転進し、5月初頭よりサイパン、沖縄方面からの敵大・中・小型機の来攻に対する自主的攻撃作戦を開始するかたわら、九州西方海面に出没する敵哨戒機の掃蕩戦を実施した。七月に入るや、敵各種機による九州に対する空襲が頻繁化し、これと対峙する我方の目標はB-125、B-124、P-147、P-151、P-138、F4U、F6F及びB-129と急激に増大したが、保有燃料制限のため、戦闘飛行にも制約を受けつつ、また不備な基地築城のなかにありながらも万策をつくして被爆に對処しつつ、本土決戦に備えて士氣衝天、原子爆弾の使用に遭つても敵愾心ますます熾

烈であつたが、八月十五日突如終戦の大詔を挙げるに至つた。

この間飛行機隊は、随所に行動してしばしば敵の心胆を寒かしめ、敵機撃墜数一七〇機に及び、御嘉賞を挙げ、また感状を授与される等、武勲顯著なるものがあつたが、各戦闘飛行隊長海軍大尉鶴見孝、林喜重、林啓次郎、菅野直、それに各分隊長松崎国雄、嶋孝三、井上伊三郎、木下一周等、善戦連闘ついに戦死し、外搭乗員七〇名を失つた。

#### 口 主要戦闘

① 三月一九日 機動部隊邀撃

(松山) 使用兵力一紫電、

紫電改五四機、彩雲三機

戦果一撃墜F6F・F4U

三機、SB2C四機計五七機

内F4U機は地上銃火による

自爆一三機(内一機は彩雲)

本戦闘に對し連合艦隊長官より感状を授与される

四月一二日 喜界島制空

(鹿屋) 使用兵力一紫電改三機

戦果一撃墜F4U

②

④ ③ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮

四月一六日 喜界島制空

(鹿屋) 使用兵力一紫電改二機 戰果一なし 被害一

自爆一機

四月一八日 南九州

上空におけるB129邀撃

(第一国分) 使用兵力一不

明 戰果一B129三機

被害一未帰還二機、大破(戦

傷)二機、基地被爆による

炎上・大破約一五機

五月四日 喜界島制空(大

村) 使用兵力一紫電改三六

機 戰果一撃墜F6F、F

4U 三機 被害一未帰還

六機

五月四日(一) 北九州方

面B129邀撃(大村)使

用兵力一紫電改約六〇機

戦果一B129九機 被害

一自爆(空中分解)一機

計一六機 被害一未帰還

六機

七月五日 北九州哨戒(大

村) 使用兵力一紫電改八機

戦果一撃墜P151一機

被害一未帰還三機

七月二十四日 豊後水道艦載

機邀撃(大村) 使用兵力一

紫電改二機 戰果一撃墜

F6F、F4U、SB2C

計一六機 被害一未帰還

六機

八月一日 九州南部中・小

型機邀撃(大村) 使用兵力

二〇機 被害一未帰還一〇機

使用兵力一各回紫電改八

一二機 戰果一撃墜PBM

二三機、PB4P一機 被

害一未帰還六機

六月二日 南九州艦載機邀

擊(大村) 使用兵力一紫電

改二七機 戰果一撃墜F4

三三機 戰果一F6F・F

4U二〇機 被害一自爆・

未帰還九機

四月一八日(二) 南九州

上空におけるB129邀撃

(第一国分) 使用兵力一不

明 戰果一B129三機

機 被害一未帰還四機

五月二二日 喜界島制空(大村) 使用兵力一紫電改

U八機 被害一未帰還二機

六月二二日 喜界島制空(大村) 使用兵力一紫電改

U八機 被害一未帰還二機

一計六機、B124一機、

B129一機 被害一未帰

還九機 続く

西海方面哨戒機掃蕩(大村)

使用兵力一各回紫電改八

一四七一機、B124一機

(不確実) 被害一未帰還三機

八月八日 九州北部大・

中・小型機邀撃(大村) 使

用兵力一紫電改二四機 戰

果一撃墜P147・P15

一計六機、B124一機、

B129一機 被害一未帰

還九機 続く

西海方面哨戒機掃蕩(大村)

使用兵力一各回紫電改八

一二機 戰果一撃墜PBM

二三機、PB4P一機 被

害一未帰還六機

六月二日 南九州艦載機邀

擊(大村) 使用兵力一紫電

改二七機 戰果一撃墜F4

三三機 戰果一F6F・F

4U二〇機 被害一自爆・

未帰還九機

四月一八日(二) 南九州

上空におけるB129邀撃

(第一国分) 使用兵力一不

明 戰果一B129三機

機 被害一未帰還四機

五月二二日 喜界島制空(大村) 使用兵力一紫電改

U八機 被害一未帰還二機

一計六機、B124一機、

B129一機 被害一未帰

還九機 続く

西海方面哨戒機掃蕩(大村)

使用兵力一各回紫電改八

一二機 戰果一撃墜PBM

二三機、PB4P一機 被

害一未帰還六機

六月二日 南九州艦載機邀

擊(大村) 使用兵力一紫電

改二七機 戰果一撃墜F4

三三機 戰果一F6F・F

4U二〇機 被害一自爆・

未帰還九機

四月一八日(二) 南九州

上空におけるB129邀撃

(第一国分) 使用兵力一不

明 戰果一B129三機

機 被害一未帰還四機

五月二二日 喜界島制空(大村) 使用兵力一紫電改

U八機 被害一未帰還二機

一計六機、B124一機、

B129一機 被害一未帰

還九機 続く

西海方面哨戒機掃蕩(大村)

使用兵力一各回紫電改八

一二機 戰果一撃墜PBM

二三機、PB4P一機 被

害一未帰還六機

六月二日 南九州艦載機邀

擊(大村) 使用兵力一紫電

改二七機 戰果一撃墜F4

三三機 戰果一F6F・F

4U二〇機 被害一自爆・

未帰還九機

四月一八日(二) 南九州

上空におけるB129邀撃

(第一国分) 使用兵力一不

明 戰果一B129三機

機 被害一未帰還四機

五月二二日 喜界島制空(大村) 使用兵力一紫電改

U八機 被害一未帰還二機

一計六機、B124一機、

B129一機 被害一未帰

還九機 続く

西海方面哨戒機掃蕩(大村)

使用兵力一各回紫電改八

一二機 戰果一撃墜PBM

二三機、PB4P一機 被

害一未帰還六機

六月二日 南九州艦載機邀

擊(大村) 使用兵力一紫電

改二七機 戰果一撃墜F4

三三機 戰果一F6F・F

4U二〇機 被害一自爆・

未帰還九機

四月一八日(二) 南九州

上空におけるB129邀撃

(第一国分) 使用兵力一不

明 戰果一B129三機

機 被害一未帰還四機

五月二二日 喜界島制空(大村) 使用兵力一紫電改

U八機 被害一未帰還二機

一計六機、B124一機、

B129一機 被害一未帰

還九機 続く

西海方面哨戒機掃蕩(大村)

使用兵力一各回紫電改八

一二機 戰果一撃墜PBM

二三機、PB4P一機 被

害一未帰還六機

六月二日 南九州艦載機邀

擊(大村) 使用兵力一紫電

改二七機 戰果一撃墜F4

三三機 戰果一F6F・F

4U二〇機 被害一自爆・

未帰還九機

四月一八日(二) 南九州

上空におけるB129邀撃

(第一国分) 使用兵力一不

明 戰果一B129三機

機 被害一未帰還四機

五月二二日 喜界島制空(大村) 使用兵力一紫電改

U八機 被害一未帰還二機

一計六機、B124一機、

B129一機 被害一未帰

還九機 続く

西海方面哨戒機掃蕩(大村)

使用兵力一各回紫電改八

一二機 戰果一撃墜PBM

二三機、PB4P一機 被

害一未帰還六機

六月二日 南九州艦載機邀

擊(大村) 使用兵力一紫電

改二七機 戰果一撃墜F4

三三機 戰果一F6F・F

4U二〇機 被害一自爆・

未帰還九機

四月一八日(二) 南九州

上空におけるB129邀撃

(第一国分) 使用兵力一不

明 戰果一B129三機

機 被害一未帰還四機

五月二二日 喜界島制空(大村) 使用兵力一紫電改

U八機 被害一未帰還二機

一計六機、B124一機、

B129一機 被害一未帰

還九機 続く

西海方面哨戒機掃蕩(大村)

使用兵力一各回紫電改八

一二機 戰果一撃墜PBM

二三機、PB4P一機 被

害一未帰還六機

六月二日 南九州艦載機邀

擊(大村) 使用兵力一紫電

改二七機 戰果一撃墜F4

三三機 戰果一F6F・F

4U二〇機 被害一自爆・

未帰還九機

四月一八日(二) 南九州

上空におけるB129邀撃

(第一国分) 使用兵力一不

明 戰果一B129三機

機 被害一未帰還四機

五月二二日 喜界島制空(大村) 使用兵力一紫電改

U八機 被害一未帰還二機

一計六機、B124一機、

B129一機 被害一未帰

還九機 続く

西海方面哨戒機掃蕩(大村)

使用兵力一各回紫電改八

一二機 戰果一撃墜PBM

二三機、PB4P一機 被

害一未帰還六機

六月二日 南九州艦載機邀

擊(大村) 使用兵力一紫電

改二七機 戰果一撃墜F4

三三機 戰果一F6F・F

4U二〇機 被害一自爆・

未帰還九機

四月一八日(二) 南九州

上空におけるB129邀撃

(第一国分) 使用兵力一不

明 戰果一B129三機

機 被害一未帰還四機

五月二二日 喜界島制空(大村) 使用兵力一紫電改

U八機 被害一未帰還二機

一計六機、B124一機、

B129一機 被害一未帰

還九機 続く

西海方面哨戒機掃蕩(大村)

使用兵力一各回紫電改八

一二機 戰果一撃墜PBM

二三機、PB4P一機 被

害一未帰還六機

六月二日 南九州艦載機邀

擊(大村) 使用兵力一紫電

改二七機 戰果一撃墜F4

三三機 戰果一F6F・F

4U二〇機 被害一自爆・

未帰還九機

四月一八日(二) 南九州

上空におけるB129邀撃

(第一国分) 使用兵力一不

明 戰果一B129三機

機 被害一未帰還四機

五月二二日 喜界島制空(大村) 使用兵力一紫電改

U八機 被害一未帰還二機

一計六機、B124一機、

B129一機 被害一未帰

還九機 続く

西海方面哨戒機掃蕩(大村)

使用兵力一各回紫電改八

一二機 戰果一撃墜PBM

二三機、PB4P一機

## 「ご縁」

海原会会員

富澤奈津子

(山形県上山市在住)

長野県出身、乙種海軍飛行予科練習生（以下「乙飛」と記述）  
六期 山岸昌司さんと、山形県在住の私の「ご縁」は、実際の地理的距離以上に遠い遠いものでした。

私は先の大戦で戦われた海軍航空隊員の方々について調べ、その肖像画を描き残すということをライフケーストとしています。これは自分なりにできる慰靈であり、日本人にもう一度彼らを思い出してほしいという気持ちからです。

その一人として、山形県出身で「南太平洋海戦」で戦死された甲種飛行予科練習生（以下「甲飛」と記述）四期、安部晃さん（空母「翔鶴」雷撃隊、電信員）を調べていく過程で、同じく「翔鶴」雷撃隊員であられた山岸さんを知ることとなりました。



平成30年筑波空慰靈祭

この日は、「翔鶴」雷撃隊を日々追っていた私にとって、偶然とは思えないほど衝撃的「ご縁」の日となりました。

（山岸さんのお墓は大町の山里にあり、二回のお墓参りは、平林さんも私も、熊やら猪やら出たら怖い怖いと大騒ぎでした）  
(笑)

そのころ平林さんは、山岸さんとペアで戦死された偵察員（児玉清三さん）と電信員（村上守司さん）のお二人のことをどうしても知りたいと願つておいででした。

たまたま私が山形県在住であったことで同郷の、偵察員であつたこと、後日、茨城県にお住いの研究



行方を知ることになりました。しかし、児玉さんの手掛かりを掴んだのは残念ながら、児玉さんを知る唯一のご親族が亡くなつた直後のことであり、お話をうかがうことはできませんでした。そのことは今でも悔やまれます。

ちなみに児玉さんは、私が元々調べていた安部晃さんとずっとペアであつたこともわかり、これもまた不思議な「ご縁」だと思わざるを得ません。

電信員の、乙飛九期の村上守司さんに關しては、平林さんの知人である乙飛九期について専門的に調査研究している奈良県在住の女性から、とても貴重な情報がもたらされました。それによると、村上さんも山岸さんと同じ長野県出身であり、それもまた何かの「ご縁」のように感じました。

平林さんとお付き合いする中で、「叔父さんに会いたい近づきたい」という願いは、平林さんにとっての執念のように思えなくなりませんでした。

者、飛田伸二さんを紹介いたしました。山岸さんの最期も、安部晃さんの最期も知ることができました。

お二人の最期を知ったとき、

もうすでにここにはいない安部さんや山岸さんを思うと涙が止まりませんでした。

もう一度日本人に彼らを思い出してほしい、知つてほしいと、うつて今日までやつてきた私は、彼らはいつも隣にいる大切で大きな存在でした。

十分：彼らはもういないとわ

かっていたのに……。

ですがここで終わりではありません。彼らの生きた証を、そして最期の様子を、私も見つめたいという気持ちは色褪せることはありませんでした。

最初に戻りますが、私が行っていること、それは彼らが遺された写真や思い出、お人柄からその方を絵に遺すことです。やつと在りし日の山岸さんを描き遣すことができました。

山岸さんを知つてからの数年分の想いを籠めました。できうるならば、まだ知りえなかつた

ころの分も籠められていたらいなと思います：



文章にしてくださいました。僭越ながら、私の拙いイラストを載しておりますので、状況を参考してくださいとあります。

ちなみに、インターネットで「ホーネット 南太平洋海戦艦爆」などと検索しますと、元の写真が出てきます。

「ホーネットに魚雷を命中させた山岸一飛曹」

昭和十七年六月、山岸昌司

飛曹は筑波空教員から「翔鶴」乗組に転勤し、同艦飛行隊四二小隊二番機の操縦員として南太平洋海戦（昭和十七年十月二十六日）を迎えます。

乗機は九七式艦上攻撃機（以下「九七艦攻」と記述）一二型です。

そして、第一航空戦隊（以下「一航戦」と記述）第一次攻撃に参加しました。

その際、山岸機は敵空母ホー

ネットの右舷側を雷撃した翔鶴飛行隊長村田重治少佐（海兵五十八期）直率の第一中隊十一機の中の一機であり、第三小隊の二番機でした。

（正式には飛行隊四二小隊所属になるが攻撃隊編成時には、第一中隊第三小隊二番機となる。）因みに第二中隊九機は分隊長鷲見五郎大尉（海兵六十五期）の指揮のもと、撃墜を企図してホーネットを左舷側から雷撃。惜しくも命中魚雷なし。

この戦闘の状況は、山岸一飛曹が属した第一中隊第三小隊長機（一番機）の操縦員であった萩原末二氏（操三九一飛曹）が、昭和三十一年に雑誌「丸」に寄稿した手記に克明に記されています。

その手記によると小隊三機のうち、三番機は攻撃以前にグラマン（エンタープライズのVF10所属のF4F-4と推定）に撃墜され、小隊長機と山岸機の二機がTF17（第十七任務部隊ホーネットを旗艦とする空母）

機動部隊)の輪型陣内での魚雷投下に成功した模様です。

さて、南太平洋海戦の劇的な瞬間を捉えた写真といえば、まず想起されるのは例の九九式艦

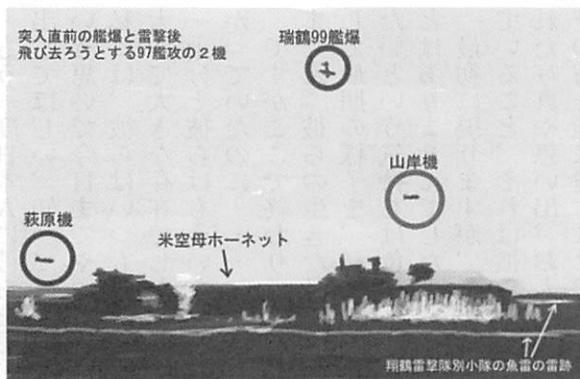
ています。

この写真は、一九四二年の海

空戦の緊迫した状況を現代に伝える屈指の名写真と思われます。

そこで、先の萩原氏の手記ですが、実は・・・この著名な写真の状況と、実に酷似した内容が綴られているのです。

この事実から何が判明するのでしょうか?



上爆撃機(以下「九九艦爆」と記述)突入の写真ではないでしょうか。

この写真には、ホーネットの艦橋に向かってほぼ垂直に降下して突入自爆せんとする九九艦爆一機のほか、雷撃を敢行する二機の九七艦攻が、明瞭に写つ

この前後のシーンの写真も数葉現存しています。

思われる)。

では、戦闘の事実を裏付ける根拠として、米軍が撮影した一連の写真に符合する、第一中隊第三小隊(四二小隊)の行動を、萩原氏の手記から箇条書き的に①～⑥に分けて適記してみます。

よう。

なお、参考として二葉の写真を模した富澤さんのイラストを掲げて頂きましたが、①②については上段のイラストを、③④⑤については下段のイラストをそれぞれご参照下さい。

① 小隊が射点に達する直前二番機である山岸機が一番機より

前方を飛んでいた。

② ホーネットが、取り舵一杯の

変針をした(第一・第二小隊

の魚雷を回避するためと思われる)

ので、同艦のやや右舷

前方から進入した小隊は、方

位角が移動してしまった(そ

の結果は写真に見る通り、後方からの近接雷撃になつたと

では、写真との対比で①～⑥

なお、この写真は当時、ホーネットの右舷側に占位した重巡、

ペンサコラ艦上から撮影され、

③ 自機の魚雷投下直後、萩原氏は前方に見えるホーネットの艦橋付近が爆発するのを目撃(本人は爆弾命中と記すが、この海戦でホーネットの艦橋付近の爆発は九九艦爆の突入によってのみ生じている)。

④ 一番機(萩原氏操縦)は避退する際ホーネットの右舷側を、低空を這い艦と平行するように飛行した。

⑤ 二番機(山岸機)は一番機の前方で魚雷投下を終え、ホーネット上空を飛び越えるも、

バンクをした瞬間被弾し、反転してホーネット艦上に自爆

を図ろうとしたが果たせず、海中に突入してしまった。

⑥ 一番機の偵察員(乙四 柴田

飛曹長)と電信員(甲五 渡辺二飛曹)が、自機の魚雷命中を確認した。

の内容を考察してみましょ。

す。

爆発を起こした状況を写真は伝えてい

突入九九艦爆が降下するシ

ンを捉えた写真（上段イラスト）

のホーネットは、艦尾波の長さから、三十ノット近い高速で航進中であり、しかも傾斜の状態から、左回頭（取り舵）中であると思われます。

この状態は萩原氏手記の②に符合します。よく見ると、この転舵で回避されたと思われる雷跡が、ホーネットの手前の海面に見えます。

④の状況は瑞鶴所属の九九艦爆がホーネットの煙突の一角に激突した時（下段イラスト）と考えて、ほぼ間違いないと思われます。

だから①のように、後方を飛んでいたのが一番機であろうと思われるのです。

何故なら、操縦していた萩原氏が、ホーネットの艦橋付近の爆発を目撃するのが可能な位置関係を考えるなら、後方の九七艦攻でなくてはならないからで

ついでに付言するならば、この写真が撮影される数秒前に、山岸機と思われる前方の九七艦攻が魚雷を投下しています。投下された魚雷は、投下機を凌ぐ速度で若干前方へ向かって飛翔した後、海面に射入します。

写真（上段イラスト）の中でホーネットの艦尾付近に白い濛氣が見えますが、海面の射入痕から立ち上がった水柱が、消えようとしている状態です。

山岸機の近接発射の実情を示しています。

この写真に連続したショット（下段イラスト）は、ご覧になつた方も多いでしょう。

ホーネットの艦橋から九九艦爆突入の爆炎が上がるシーンです。

突入機は一旦ホーネットの煙突の左前方角に激突した後、艦橋横の飛行甲板に落下しました。艦爆の搭載燃料が凄まじい

一方、山岸一飛曹の二番機の姿は、ホーネットの艦首のやや前上方に認められます。

この写真の、原版に近いコピーを見ると、この機体は被弾による黒煙らしいものを引いており、ホーネットに向けて降下中のよう見えます。これが⑤の状況です。

さらに、⑥につながる状況が、米側の記録で証明されます。



艦爆体当たり直後

一方、二機の艦攻はどうしたかというと、写真の右端に、低空をホーネットと平行して飛び、それを追い越した一機が見えます。

驚くほかはないのですが、米側は以下の事実を記録しています。

これはまさに④の状況にほかなりません。こうして避退したものが、萩原氏操縦の一番機です。

一本目の魚雷が中央部に命中したのが、艦爆機が突入した約三十秒後、後部への二本目がその二十秒後（艦爆突入から約五十秒後）であるというのです。タイミングから判断して、こ

れはまさに四二小隊の二機が放つた魚雷が命中したとしか思われません。

米側の記述によると、村田中

隊（第一中隊）の右舷への雷撃は、三つの小隊の順撃によつて行われたと思われます。

そのうち、ホーネットに向かつて発射された魚雷は一個小隊二本づつ、計六本です。

さらに、米側の記録から判断すると、この六本のうち、最初の小隊（指揮小隊三機、村田少佐操縦の一機）は F4F との空戦で被弾、速度が落ちたところで対空砲火に斃れた模様、同機の魚雷発射は確認できない）の二本は艦首をかすめ、次の小隊（第一小隊 海兵六七期 鈴木中尉指揮の二機）の二本は発射過早のため、転舵によつて容易に避けられた事が伺えます。

このように、ホーネットは右舷側から接近した四本の魚雷を、高速と巧みな操縦でまずかわしました。

ならば、残るもうひとつの小

隊、すなわち第三小隊（四二小隊）が、最後に後方から発射した二本が、ホーネットに命中したのは歴然です。⑥の記述通りです。

残念ながら、ミッドウェー海戦でヨーティンを撮つた時とは異なり、ベンサコーラのカメラマンは、ホーネット被雷の瞬間を撮影してはおりません。

ベンサコーラが四二小隊に続く四九小隊（第一中隊第四小隊の二機）に攻撃され、急転舵したため、動搖著しかつた故と思われます。

この四九小隊の雷撃を以て、第一中隊の攻撃は終了しました。

ホーネットの中央部に命中した一本目の九一式改三魚雷によ

る爆発は、四層に設（しつら）えた水中防御隔壁をぶち破り、破口からの浸水効果で、前部機械室を満水状態にし、さらに隣接する後部機械室や一部ボイラ

ー室の床上まで、大量の海水を躍り込ませて、それらを全て稼働不能にさせました。

機械室とはエンジンルームで

す。

その内部には、全長二百五十メートル、二万五千トンの艦体

を、三十ノット以上の高速で航進させる動力源、十二万馬力の蒸気タービンが据えられています。

その機能が、わずか一本の魚雷による浸水で、完全に喪失させられてしまつたのです。

ホーネットは、航行不能となりました。その二十秒後に後部

に命中した二本目の魚雷は、いわばだめ押しの破壊力を發揮し、その爆発の衝撃で、舵故障を起こさせました。

空母の巨大な一枚舵は、左三十度で停止したまま動かなくなりました。

まさに、ホーネットの死命を制したのは、四二小隊の二機が発射した二本の魚雷であったのです。

ホーネットの転舵で、射点が

それが奏功したと思われます。中でも、山岸一飛曹の必中の執念は凄まじく、一番機よりも先行し、さらに踏み込んで雷撃を敢行しました。

また、「予科練外史（四）」に山岸機の雷撃行動を目撃した四一小隊三番機の電信員、萩谷三飛曹（乙九）の証言があります。

それによると、山岸機は魚雷投下直前に機を左側（ホーネット側）に切り返したそうです。これは、ホーネットの転舵に沿つて刻々と広がる方位角（やがて乗機と敵艦の進路が平行になれば射線が目標を捉えられず、魚雷は命中しない）を修正しようとしました。

まさに、ホーネットの死命を制したのは、四二小隊の二機が発射した二本の魚雷であったのです。

何故なら、切り返すには機翼を傾けねばならず、その際海面との接触を避けるために、やや高度を上げねばなりません。

そうなれば、艦側の猛射を浴びる事は必至であるからです。

いわば、捨身の行動とも言え

ましょう。

この凄絶な突撃により山岸機の魚雷は射距離を詰めた分、萩原機の魚雷より、目標到達が早かつたと推測出来ます。

故に、ホーネットのど真ん中に当たつた一本目の魚雷が、山岸機のものである蓋然性は、極めて高いと思われます。

山岸一飛曹は、自らの放った魚雷の行方を、我が眼で確認したかった（ペアが負傷あるいは戦死していた可能性あり）のでしょうか？

その為に、機を傾け、操縦席から後方を振り返つたのかもしれません。そのバンクの刹那、不幸敵の命中弾により、機は発火してしまいます。

咄嗟に：彼はホーネットへの体当たり自爆を決意：というよりも反射的に機をホーネットに向けて反転させます。

攻撃機搭乗員としての日頃の覚悟がそうさせたのでしょう。

この壮烈極まる覚悟は、当時、同乗のペアも共有していたはず

です。

この覚悟とその振る舞い、先の九九艦爆の搭乗員に対しても同様ですが、後世に生きる私は、ただただ瞠目し、頭を垂れるのみです。

米側の目撃談によれば、この時、ホーネットに突入しようとした山岸機は、激しく自転しながら海中に落下したとのことです。

嗚呼。

F4Fの執拗な襲撃に耐え、輪型陣の十字砲火を冒して突進しながら、高速で回避する敵艦を照準する：この極めて困難な雷撃行を達成した山岸一飛曹。

惜しむらくは、魚雷命中の瞬間を網膜に宿すことなく逝きました：享年二十二歳。

しかしながら、その行動は勇敢の一語に尽き、その最期は後にも言えます。

（飛田伸二さんの著書から引用させていただきました。）

この内容の詳細については、

「母艦航空隊」（潮書房光人社）

の、萩原末二さんの項、「南太平洋海戦での戦い」に掲載されています。この日の攻撃の最初から、萩原さんらが駆逐艦に救出されるまでが書かれています。

## 青春の日々

海軍甲種飛行予科練習生

第十三期生

石井 信市郎

昭和十八年十月一日

土浦海軍航空隊入隊

昭和二十年九月六日

郡山海軍航空隊復員



乙種海軍飛行予科練習生第六期

海軍飛行兵曹長

故 山岸 昌司

長野県大町出身

空母「翔鶴」乗組員として、南太平洋海戦に参戦、昭和十七年十月二十日敵空母ホーネットを攻撃中に被弾戦死

### 入隊の日

旧制中学の卒業を待たず、四年生の秋、甲種飛行予科練習生として志願し、土浦海軍航空隊に入隊。十六才だった。

当時の社会情勢では、第二次大戦中で、軍隊志願が非常に多く、政府も国策として青年達を勧誘していた。そして、父母も反対できないような雰囲気だった。

『命をかけて祖国を護る』若者は皆只その一筋の思いだけだった。昭和十八年十月一日。決死の門出は、村の仲間の人達だけに伝えて簡素だった。

当日は、何時もの中学の制服と帽子・靴で、婦人会で心をこ

めて作ってくれた「千人針」だけをしつかりと腹に巻いてさあ！出発だ。

荷物は何も無い。軍隊からの指令書一枚だけ、それに幾許かの小遣い銭を持って行つた。

見送りは、父と本家の伯父だけ、家から四kmもある小学校前のバス停まで一緒に歩いて見送つてくれた。当時は、車など

は無く、部落からも頻繁に出征していたので行事は簡素化して、ときには教官の厳しい鉄拳がとんでもくる。

少年兵の一日の生活は分割みで、ときには教官の厳しい鉄拳がとんでもくる。

最も辛い事と云えば、朝が早い事で、六時起床ラッパとともに起き、吊り床を素早く束ねて、

部屋の中段にある格納所に整然

と格納することだが、体の小さ

い少年兵にはきつかった。

しかし、不思議に起床ラッパ

とともに目は冴え、体も軽快に

よく動き、人並みにはやれた。

また、海軍は水を非常に大切

にする。洗面器一杯の水で、歯

をみがき、手を洗い、洗面と全

部一杯で済ませた。艦内生活を

基本にしての訓練だ。

洗面が終わると、整列し、隊

を組んで広い練兵場まで行き、

航空隊につき、落ち着いた時、

係官が誘導して、土浦に行き着いたのではないかと思う。

門口で見送つてくれた母や姉妹の顔が頭をよぎつた。

## 軍隊生活（土浦航空隊で）

飛行兵は、特に機敏さや慎重さや正確さが要求された。

「君達のチャンスは一度だけだ。失敗は成功の基ではない。破滅だ。」入隊後、教官からの第一声は本当に心に應えた。

少年兵の一日の生活は分割みで、ときには教官の厳しい鉄拳がとんでもくる。

最も辛い事と云えば、朝が早い事で、六時起床ラッパとともに起き、吊り床を素早く束ねて、

部屋の中段にある格納所に整然

と格納することだが、体の小さ

い少年兵にはきつかった。

しかし、不思議に起床ラッパ

とともに目は冴え、体も軽快に

よく動き、人並みにはやれた。

また、海軍は水を非常に大切

にする。洗面器一杯の水で、歯

をみがき、手を洗い、洗面と全

部一杯で済ませた。艦内生活を

基本にしての訓練だ。

洗面が終わると、整列し、隊

を組んで広い練兵場まで行き、

航空隊につき、落ち着いた時、

係官が誘導して、土浦に行き着いたのではないかと思う。

門口で見送つてくれた母や姉妹の顔が頭をよぎつた。

素だつたが大変おいしかつた。

日常訓練の内、学科授業は殆んど兵舎内で行われるし、体育

や教練は練兵場でそれから水泳訓練はプール、ヨット、カツタ

ーは霞ヶ浦で船を出して行われた。

一班で一隻の短艇を使用して人数は十人前後に教官一人といつたところであつた。

こうして八ヶ月位土浦で一般的な基礎学科や体育技能訓練をおわり、次の隊に移動した。

われわれ訓練隊は、専ら赤とんぼを使って、練習生が前席に乗り、教官が後部席に乗つてひと組となつて飛行訓練に励んでいた。

われわれ訓練隊は、専ら赤とんぼを使って、練習生が前席に乗り、教官が後部席に乗つてひと組となつて飛行訓練に励んでいた。

操縦桿は前と後ろが連結されていてどつちでも操縦できるようになつてている。

何回か、教官と同乗し、大丈夫だと教官が判断すれば、単独飛行をさせてくれる。私の場合は、七時間十分の同乗訓練の後単独飛行を行つた。初めての単独飛行は、まだ頼り無く体の震えが止まらなかつた。そして着陸してもエンジンの絞りが甘かつたので惰力があり、着陸距離がながくなつてしまつたことを

## 第二の基地 (名古屋海軍航空隊)

### 岡崎分遣隊



前列右から2人目が筆者、同左から2人目は回天特攻で戦死した森稔海軍少尉

覚えている。

陸してもエンジンの絞りが甘かつたので惰力があり、着陸距離がながくなつてしまつたことを

その頃は、燃料も乏しく思う  
ように訓練ができなかつた。そ  
れでも一番早いクラスにはいつ  
て単独飛行ができた好かつた。

この後は、特殊飛行に移つて  
失速反転・急降下・宙返り・背  
面飛行等の訓練で総飛行時間で  
百時間ちょっとだつた。まだ、  
ひよこかなあ！

### 第三の基地

(郡山海軍航空隊)

こうして、第三の基地に移動  
したのが、昭和十九年の五月頃  
だつたと思う。

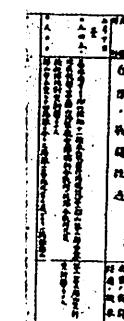
その頃の資料がないので、正  
確なことは分からぬ。

草原のようになつていて、設  
備などは殆ど無かつた。新しく  
開拓した場所かも知れない。

郡山では、練習機も少なく、  
燃料が不足して余り訓練ができ  
なかつたよう覚えてゐる。そ  
のうちに、アメリカ機による攻  
撃をうけ、飛行場は穴だらけに  
なり、使用できなくなり、爆弾  
の破片を拾い集める仕事がで  
きてしまつた。その上、兵舎は、  
破壊されて使用できない状態に

なり、東方三、四kmの山間に横  
穴を幾つも掘つて寝台をいくつ  
も入れて、そこで寝ることにな  
つた。

当時の米軍の攻撃を物語る  
郡山基地戦闘詳報



あまりに大きな変化に、自分  
自身の心の整理をどう付けたら  
いいのか迷つていた。

ここで、二年間の軍隊生活の  
中で心に残つたエピソードを二  
つ書き加えたい。一つは第二の  
基地で休日に友人とたまたま食  
べた畠の大根のこと、もう一つ  
は、遠いところを両親が何度も  
面会に来てくれたことである。

### 畠の大根 (第二の基地で)

毎日そこからの通勤と言つて  
けだ。そうするほうが安全だつ  
たのだろう。

そして暑い夏の日、突然『全  
員兵舎前に集合』の指示がでた。  
スピーカーを通して終戦の詔勅  
を聞いた。信じられなかつた。

昭和二十年八月十五日、日本  
は、連合国に無条件降伏をした。  
そして、戦争は終わつた。勝利  
を信じ、厳しい訓練にも耐えて  
きた志願兵にとって、まさに沈  
痛の思いだつた。

終戦により、軍隊はすべて解  
散としまつた。それから三週間  
後、我々に復員命令がくだつた。  
九月一日だつた。

茶菓子を頂き、厳しい日頃の  
訓練を忘れて故里や友達のこと  
など、楽しく話しあつた。大変

親切に応対して頂き、寛げる一  
時を過ごす事ができた。

お札を述べ、門限に遅れない  
よう帰路を急いだ。

暮れかけた、畠の中の道を足  
早にきたとき、収穫した残りの  
大根が枯れ葉の下から何本か顔  
を覗かせていた。

一人が突然冗談まじりに言つ  
た。若い少年兵の胃袋は、まだ  
まだ余裕があつた。

「食べられるかも知れない」

「うん、食べられそうだなあ」

急にみんなが活気づいた。

早速、紺の制服を汚さないよ  
う慎重に土を払い、畠の大根を、  
それぞれ一本づつ抜いて、一齊  
にがぶりついた。

実家にいた時は、大根などと  
思つてゐたが、何とこのときの  
大根は、甘くて大変おいしかつ  
た。みんなびつくりした。

この日は、ボランティアのA  
さんの家に寄せて頂いた。Aさ  
んの家は薬局だつた。しかし、  
戦時中だつたので薬は殆ど無か  
つた。

このとき初めて知つた。大根は、  
生育が悪く、多分農家の人が畠  
に捨てたままになつていてもの  
だからまあ、見ても咎めること  
もなかつただろう。

むしろ、紺の制服の少年兵達

が、大根にかぶりついている様子は、ユーモラスというか、一方では、同情的に見られたかもしれない。近頃、冬の畠の大根を見るとあの少年兵時代のたつた一度のスリルが楽しかった思い出として脳裏をよぎる。あのときの同期生の顔が浮かんでくる。

小柄な母は、モンペ姿で、完治しない足の傷をかばいながらきてくれた。

あるときは、おいしい大きなおはぎをいっぱい持参してくれた。前の晩に姉や妹達も手伝つて早朝の出発に間に合わせて準備してくれた事だろう。

父母と、面会室で持参してくれた。

となつてしまつた。父は六十三才の若さで他界し、母は、長年の足の傷を克服して九十二才の長寿を全うした。

父にも母にも世話になつただけで、是といった親孝行は何一つできなかつた。

間もなく、五十六回目の終戦記念日（平成十三年）郷里の

二十年九月六日 隊から復員命令が出た。入隊してから二年近くの歳月が過ぎていた。二年の歳月は、二十年とも思われる程長い日々だった。

これから、日本はどうなるのだろう。まだ十八才の若さの胸の内は複雑だった。

みんな、どうしているだろうか！

れたおはぎを頬張つてゐると、実家に帰つたような錯角に陥つてしまふのである。

両親の墓前に、香を焚き、花を供えて靈を弔おう。

両親の面会  
入隊中、父母は何回か心づく  
しの手料理を持って面会にきて  
くれた。

田舎の話がほんとに懐かしく  
面会時間が終わり、父母を見送  
つてはたと厳しい日常の気分に  
もどる。

肩を落として遠ざかる両親の

そして終戦  
昭和二十年八月十五日終戦の  
詔勅が下され、日本は無条件降  
伏をした。

何よりも嬉しかった。  
毎日、農作業に追われている  
両親にとつて、家から二時間位  
歩いて駅に行き、それから、何  
回か列車を乗り継いで三時間も  
また岡崎には、五時間もかけて  
面会にきてくれた。

最後の面会の日は、東京大空襲の日だつた。昭和二十年三月十日帰りは、列車が不通になり東京から市川駅あたりまで線路伝いに歩いて帰宅したとのこと

だつた。線路には、爆撃のため犠牲者の死体が山と積まれ、戦局の厳しさをひしひしと感じたと手紙で知つた。

その父と母も、今は天国の人

長く続いた第二次世界大戦は、連合軍の勝利で終結した。國民が一丸となつて戦つた努力も効なく、大勢の戦士を大陸にまた南海に失つた。本人は勿論、残された家族も残念に思つてゐるだらう。心を新たにして、頑張らなければならない。

思つていた父母や姉妹・弟達また祖父母もみんな達者だろうか、夢を見ているようだつた。上野駅までは、団体でかえり、ここで解散した。

お昼頃、千葉駅に着いた。実家の方は、交通の便が悪いので、その日の内にはとても帰れそうになかつたので、仕方な

昭和二十年八月十五日終戦の詔勅が下され、日本は無条件降伏をした。

長く続いた第二次世界大戦は、連合軍の勝利で終結した。

國民が一丸となつて戦つた努力も効なく、大勢の戦士を大陸にまた南海に失つた。本人は勿論、戦争の家族の幾人と思つ

毎にまとまって復員の途に着いた。  
再び会うことは、出来ないと  
思っていた父母や姉妹・弟達ま  
た祖父母もみんな達者だろう  
か、夢を見ているようだつた。  
上野駅までは、団体でかえり、  
ここで解散した。

お昼頃 千葉駅に着いた  
実家の方は、交通の便が悪い  
ので、その日の内にはとても帰  
れそうになかったので、仕方な  
く、茂原駅まで列車でゆき、母  
校の中学近くに在学中保証人を  
依頼した親戚の家があつたので



海原会会員

平野 八代子

父はこれから先が大変だよ  
「馬鹿者が」と私と母の顔を見  
ながら呟きました。父の感は的  
中しました。

列車から全員荷物を持つて  
降りて、倉庫か格納庫のような  
所へ収容されました。コンクリ  
ートの床の上には荒縄で区分け  
がしてあり、畳二畳くらいの広  
さの所に五人程が寝泊まりして  
五日間の滞在となりました。母  
とは互い違いで、私の体の上に  
母の足を乗せ寝ました。なかで  
も辛かつたのは、襲いかかる蚊  
の大群でした。酔に反応した蚊  
に夜は一睡もできず、母の足の  
手当てをしながら昼寝で寝不足  
を解消しました。そんな時、突然  
出発命令がでました。列車ま  
で五キロの道を歩くので、歩け  
ない人は残ることになりました。  
家族が、別々になるということ

でした。私と母が残らなければ  
ならないのかと思いました。  
引き揚げの病院船が出る時  
に移動すると聞いていた父は、  
石鹼の中に隠し持っていた金の  
玉を持って飛び出していきました。  
他の者は、荷物を持ってぞ  
ろぞろと外に並び始めました。  
こんな時に、父は何処に行つて  
しまったのか、私は荷物を捨て  
母を背負つて妹と共に歩くつも  
りで縄を三本合わせて結びまし  
た。同じ車両の人達が母と私の  
荷物を持ってくれました。父が  
戻るまでと、いつまでも座り込  
んで動かないで頑張つてくれた  
人、父の事を係員に話して何分  
でもいいから出発を遅らすよう  
頼んでくれる人、何とかして皆  
で一緒に帰ろうと団結は固かつ  
た。しかし、もう出発の時を伸  
ばす事は無理な状況となり、男  
の人達が母を交代で背負つてく  
る事になりました。列車最後に並  
ました。その時土埃を上げて荷  
馬車が倉庫の前に止りました。  
車夫の横に父の姿、又も目を見  
張つてしましました。大きな荷  
台に子供や老人の荷物を山のよ

うに積んで母を乗せました。心  
配をかけて申し訳ないと、藁の  
紐を握り締めて父は泣いていま  
した。父の涙に「御苦労さまで  
した貴男のような事は私達には  
とても出来ません」「助かりま  
した」「日本は遠いですなあ」  
急に皆が元気になつたようでし  
た。笑い顔はいいなあ。このグ  
ループは暴動を免れた人達だつ  
たので、どこか旅館に逃げ込ん  
だ時の人達の様な悲壮感はあり  
ませんでした。従つて、懐も暖  
かそうでした。非常食は皆尽き  
ていました。引揚援助局なる所  
から、コーリヤンの御粥が用意  
されていましたが、ポロポロと  
していてそれを口にするのは  
疲れ切つた体には堪えました。  
下痢で道端へと駆け込みながら  
五キロの道を、皆へとへとにな  
りながら休むこともなく歩いて  
行きました。妹は頑張つて荷物  
を背負つていましたが、父が母  
の手に渡しました。妹は嫌がり  
ながらも嬉しそうでした。よく  
「私も男だもん」と負けずの妹  
でした。

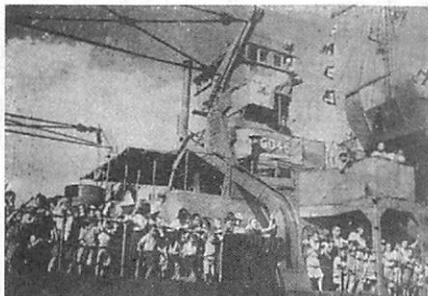
目的地には列車が待つてい  
ました。沢山の人で溢れかえつ  
ていました。裸足の人、左右の  
靴の違う人、ポロを纏い髪は逆  
立ち、わらすぼそのものの姿は、  
北の方から逃げて辿り着いた人  
達のようでした。命だけをここ  
まで持つてきた気力は、日本へ  
帰りたいエネルギー以外のなに  
ものでもないと思いました。駅  
前の人々、誰か知っている人は  
いないかと思いましたが、知つ  
て居た人達の顔は一人もいませんでした。  
前の人々、誰か知っている人は  
いるのかと思いましたが、知つ  
て居た人達の顔は一人もいませんでした。  
なんとか列車に乗り込み、今度  
は止まらないで欲しいとの願い



の中、止まつた所はコロ島なる港でした。

旗が翻っていました。船名は「長運丸」(だったと思う)。波止場にはそれぞれ思い思いの行動する大勢の人達の姿がありました。船のデッキの船員が日の丸の旗を振っています。座り込んで船に手を合わせる人、泣き伏す人万歳万歳と叫ぶ人。そこには日本人以外は誰も相合わせること





今まで飛び出した利達は、七年間の思い出の品物は何もありませんでしたが、命だけは揃つて持ち帰る事ができただけでも、満足でした。しかし、在満十七年の父はさぞや無念の思いであったことかと思いました。

久しぶりの睡眠でした。貨物船の底は暑いうえに、荒れる海に体が転げるようでした。それまで張りつめていた気持ちが緩み、安堵感に気の抜けた体は、暑さと船酔いで体力を奪われ次々と死んでいきました。遺体は白布に包まれ水葬となり海にながされました、汽笛を鳴らしながら船が遺体の周りを一周します。残念無念でした。きっと居合わせた誰もがそう感じていたと思います。船の中は船員皆が日本人でした。この頃になつて、やつと心からの安らぎを感じられるようになり、周囲の見知らぬ人が「日本の博多湾は目の前ですよ。頑張ったんだね。日の丸の旗が好きだね。一番き

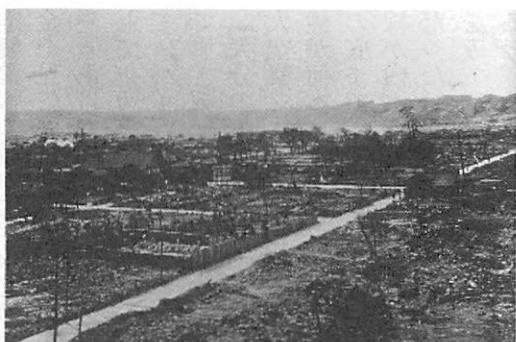
かうだと聞いたことがあるよ」  
などと笑いながら話してくれました。船は博多湾に停泊し、五  
日間は下船できませんでした。病気の感染を防ぐためと聞かさ  
れました。毎日甲板で船員さん  
から本を借りて読んだり、何と  
なく友達になつてくれて話相手  
になつてくれたりで数日を過ご  
しました。

この頃は、父がくれた石鹼で  
男の子だつた私は十七才の乙女  
と変身していました。

上陸前に「一人千円以上は持  
つて上陸はできません。千円札  
にこの切手を貼つてください」と  
言われて、沢山持つている人  
達は持ち合わせの無い人達に一  
枚一枚と配つて廻りました。上  
陸後に五百円をバックする約束  
が出来あがり、和やかな雰囲気  
が流れました。

父は、正解でした。石鹼の中  
に隠し持つた金の玉は石鹼とし  
て日本に上陸したのです。国債  
株券を海に破つて流す人、様々

第九章 歸國



焼け野原の街跡

な人間模様で一時ざわめいた後  
いよいよの上陸となりました。

上陸するや、白い粉（多分ダニやシラミの駆除目的）を全身に吹き付けられ、敗戦後の逃亡生活の中で、暴行を受けた女性は妊娠や性病の治療のために婦人科を受診することとなりました。また、下船後は数か所の温泉施設に分宿することとなりました。「一年振りだ」と昔のように成った人の体から皮が一枚一枚

かうだと聞いたことがあるよ」  
などと笑いながら話してくれました。船は博多湾に停泊し、五  
日間は下船できませんでした。病気の感染を防ぐためと聞かさ  
れました。毎日甲板で船員さん  
から本を借りて読んだり、何と  
なく友達になつてくれて話相手  
になつてくれたりで数日を過ご  
しました。

この頃は、父がくれた石鹼で  
男の子だつた私は十七才の乙女  
と変身していました。

上陸前に「一人千円以上は持  
つて上陸はできません。千円札  
にこの切手を貼つてください」と  
言われて、沢山持つている人  
達は持ち合わせの無い人達に一  
枚一枚と配つて廻りました。上  
陸後に五百円をバックする約束  
が出来あがり、和やかな雰囲気  
が流れました。

父は、正解でした。石鹼の中  
に隠し持つた金の玉は石鹼とし  
て日本に上陸したのです。国債  
株券を海に破つて流す人、様々

上陸するや、白い粉（多分ダニやシラミの駆除目的）を全身に吹き付けられ、敗戦後の逃亡生活の中で、暴行を受けた女性は妊娠や性病の治療のために婦人科を受診することとなりました。また、下船後は数か所の温泉施設に分宿することとなりました。「一年振りだ」と昔のように成った人の体から皮が一枚一枚

と剥ぎ取るよう温泉の水に流れていきました。やつとの人心地、祝いの膳が用意されていました。赤飯に尾頭つきで、男の人は一人一本のお酒がついていたと思います。

アメリカ軍の毛布が支給されました。純毛でした。たしか一枚だったと思います。夜はお互いの苦労話やこれから暮らしの話で更けていきました。「お世話になりました。お元気で」と、別れはまた辛いものがありました。昭和二十一年八月十六日吉林を出発して、九月十八日、三十四日に及ぶ私の満州からの引揚は終わりを告げました。

## 第十章 故郷へ

大分までの運賃を支払つた覚えはありません。車窓を流れるなつかしい景色、窓にしがみついて厭いませんでした。日暮れが迫る頃に、宇佐あたりで裸電球に蚊帳を吊るしている人影、縁側で涼んでいる人達、畠を自転車で行く人、日本のなつかしい風景がそこにありました。間もなく、列車は左手に別府湾を

臨むあたりを走り始めると、遠く近くの漁火、子供の頃の毎日の遊び場だった海の匂い。「空気の吸い過ぎ」と、父の一年ぶりの笑顔がそこにありました。別府駅や町筋は、肌も露わに華やかに着飾り、アメリカ兵の腕を組み抱き合う日本女性の姿に目を疑いました。別府はアメリカになつたんだと思いました。

テンポの速い外国の音楽、何

もかもが信じられない光景がそこにありました。大分駅に降り立ち目にしたものは、別府湾の海面でした。本来なら建物の蔭に隠れて見える筈がない海が月の青白い光を映していたのです。

私達が大分を出た時の町並みはそこにはなく、バラックや屋台が軒を並べる荒れ果てた町となっていました。

『敏江には結婚を約束した

人がいた。軍人だった。空襲警報の度に親父が背負つて船の底に避難させ、砂の上に布を敷いてその上に熱の体を隠しての

電車で行つたのか、歩いて行つたのか覚えていません。母の

実家は月に映えてどつかりとそ

こにありました。転がるように裸足で叔父夫婦が飛び出してきました。「心配してたぞ。よく帰ってきた。引揚が始まつてから落ち着く日はなかつた。待つ

てたぞ。大きくなつたなあ』お定まりの涙々の対面でした。しかし、そこには私が姉とも慕つたと思ひます。

敏江は病の床で白い絹の布に赤い糸で自分の名前を縫い取り彼氏に贈つたそうだ。』

ちなみに、私の家の家系は長崎出身の生糸のキリシタンで大友宗麟の地の大分に、大叔父が宣教師として来県をしたのを機会に親族大移動で大分県人となつたのです。私の従弟は今、神父として活躍しており、伯母はローマ法王に招待されたり九十八歳の今も日曜礼拝には一人で出かけるようなピックな人です。従つて、戦時中も常に礼拝を欠かさなかつた祖父には何時も憲兵の目が光つてゐたそうです。空襲警報の最中に、氷枕の止め金を見失い灯火管制用の黒布を巻きあげたところ、時を待たずしてドカドカと憲兵が入つてきました。叔父の話は続いた。

『大分の町は昭和二十年七月の大空襲で焦土と化し、海には水柱が何本も立つた。非難した船の底まで火の粉が舞つた。水平線が白んで見えないほどの水柱だった。空襲がひと段落したのをみて船底から這い出した。すると、そこには信じられないことに、我が家一軒だけが、焼け残つてゐたんだ。思わず神

への感謝の祈りをささげたよ。

旅立ちでした。

後日、白いマフラーで出陣する特攻機の兵士の写真が大きく新聞に掲載された。出陣前に宇佐基地から大分の小学校に別れに来た時の記事だった。

まぎれもない岩永君の最後の姿がそこにあつたよ。良かれと思つての岩永君の事が載つた記事を敏江に見せてしまつた友人の行動が、もう一度だけでも岩永君に会いたいと必死に現世にすがりついていた敏江から生きる力をそぎ落としていつたんだなあ。まだ、二十一才の花の盛りに帰らぬ人となつた。まるで、岩永君に導かれたかの様な穏やかな最後だつたよ。今頃は二人で仲良く暮らしていると思うよ。可哀想だつたなあ・・・」叔父の話は终わつた。

祖母から、敏江が八代子にと  
残した物として叔母の晴れ着を  
手渡されました。「姉ちゃん私は  
頑張つて帰つてきたのに何で何  
で」と泣くことしかできない私  
でした。岩永さんのことでもつ  
と知りたいという気持ちになつ  
ていました。終戦直前の二人の

原爆や東京大空襲を始めて知りました。益なき戦いで多く命や財産を無くしてしまいました。なんとか、命をながらえた者へも容赦無用の明日の暮らしが待っていました。小学校へ入学してから父は私に、人と話をする時には、できるだけきれいな言葉で会話をすることを強く要求していました。このため帰国後一人しゃべり言葉が違う私は疎外され、子供の頃の友だつた人達はひとりまたひとりと去って行きました。

えつて仇となり「満州帰り満州帰り」と周囲の人から疎外されました。広い世界を知らない島国根性の人達に何にも話す言葉はありませんでした。

家は焼け残り、叔父は網元で青年団長をする等地区で活躍していました。そのような恵まれた環境が目障りで気に入らなかつたのかもしれません。そうそう、蛇足ですが当時漁業組合員の息子さんだつた、元総理大臣の村山富市さんは明治大学を卒業して地元に帰つており、よく叔父の所に遊びに来ていました。私もよく「八代子、八代子」と可愛がつてもらいました。

私は、在学証明書もなにもなく、中途半端な年であつたので学校に行くことは考えていました。食糧難の時だつたので祖母が干し魚を背負つて行商に回るのについて回りました。何もかにもが統制品で、お巡りさんの取り締まりに悩ませられながら祖母と二人で行商に回つたのはとても勉強になりました。また要領を旨とすべしの試みの

たい、学校では教えてくれないよね。」と祖母との楽しいひと時でした。朝一番列車で宮崎まで出向くこともありました。その頃の私は、本が一番の楽しみで夜更かしして読むのいつも叱られていました。そんな私を見かねたのか叔父が「八代子も年頃になつてきたんだから、いい婿が網にかかるような場所に網（貸本屋）を張つて来たぞ、電車で通え、大学通りだ。男はより取り見取り、自分の目で選べ」と貸本店を用意してくれました。

父は不器用で愛情表現が下手な男性でしたが、その分叔父に沢山可愛がつてもらい、お蔭で楽しい電車での出勤が始まりました。父は地元にあつたトキハ百貨店の紳士服部のチーフデザイナーとしての職を得て、母は手内職、妹は洋裁専門学校とそれぞれが明日に向かつての一步を踏み出しました。

貸本店は、本棚が淋しくなる位に客足はありました。月に一度の古本の入札には叔父について

(21) 〈予科練〉

つて來たのです。

お互ひ目を見つめ合つたままの時が流れました。「海軍さんだつたんですか。」「飛行機が無くてね穴掘りばかりやつてしまつたよ。特攻のなりそこないですよ。」と、「宇佐の母方の実家に居たんですが従兄の代になりましてね。田舎でしてね。職を見つけに大分に出てきました。」「今はどちらにお住まいにならされているのですか」「そこの下宿にお世話になつています。」運命の人との出会いでした。宇佐・特攻・容姿端麗、夢のような人の出現に叔父の「網を張つてきました。」の話を思いだしてドキドキ心ときめく私でした。「鯛だ、私の鯛であつて欲しい。」一目ぼれでした。



日本髪 乙女島田

時も付きまとっていました。私も当時六組の縁談があり、全て私には不釣り合いな良縁ばかりでした。丁度その頃、町の美容院から日本髪のモデルをお願いしたいとの話が舞い込んできました。父が話を聞くことになりました。どうやら別府の公会堂で、進駐軍を招いての慰安会の席上で美容院主催の出し物が計画されるらしく、十二人の女性が一番最後に日本髪姿で出演し、歌や踊りを披露する催しらしいのですが、戦後初めての催しなので準備に大変苦労しており、是非出演してもらいたいのですが」という話でした。父は即座に「娘は別府を嫌っているので無理ですなあ」と断りました。

父は引揚の時、列車の窓から見別府を思い出して、いい気はしなかつたんだと思いました。何度も依頼にきた担当者に「日本が戦った国の兵隊を相手に、なんでそんな事をする必要があるの。亡くなつた兵隊さんの事を思い出したことはあるんですか。」なんの日本人の女の人のあの様は。頭に血が登つた。「出ません。ごめんなさい。」と私が伝えると、「そこなんですよ。アメリカの兵隊に日本の素晴らしい伝統を見せたいんですよ。そして日本髪こそが日本の誇るべき伝統なんですよ。だから、見せたいんですよ。芸者ガールでない日本娘の良さを見せたいんですよ。」と言われると、担当者の「日本娘の本当の姿」というフレーズにコロリと負けてしまい、前言を撤回することになりました。大変なことになってしまった。馴らし髪とかで十日間ほど「乙女島田」という髪型での電車出勤でした。着物にボッコリ下駄の姿はまるで見世物でした。家の者には見に

来て欲しくはありませんでした。会場には、彼には来て欲しいと思いました。でも、彼はご機嫌が悪く来てくれませんでした。会場には紫の縞紋りの振袖に羽子板が用意されていて、まずはリハーサルとなり十二人とも力ち力ちでその顔は引きつっていました。本番の時は皆で笑顔、笑顔、アメリカに見せるんではなく日本の特攻で死んでいった人達のために笑顔で頑張ろう。私が一番年が若かったので一番最後の出番となりました。最後は十二人全員で舞台や花道で思い思い踊り廻りました。花束贈呈があり大盛況の内に幕が下りました。公民館の人が、「貴女は日本舞踊を習っていたのですか。」と言つて來たので「いいえ、郷土の盆踊りの振り付けで鶴崎踊りです。」と言ふと、皆が大笑いしましたが彼の姿はありませんでした。同じ職場の女性が「残業があつたのに女人が来て、一緒に映画にいったんよ。婦人警官だつてよ。気分悪いよね。何

考えるんやろう。何人も女の子が来るんよ。まったく頭にく



鶴崎踊り

せんでした。

次々に来る縁談に私が全く関心を示さないので、父に相談さ

れて、様子を見に来ていたのだろうと思いました。ある日、叔父が頑張って待ち構えている店

に、何も知らない彼が入ってきました。彼は、いつものように話しかけることもなく、本を借りると店を出て行きました。そ

のあと、叔父も黙つて私の肩を叩いて、店を出て行きました。

久しぶりのデートで夜が遅くなりました。父から「男を連れていこい」と初めて大声で叱られました。きっと叔父が何か告げ口したなど直感しました。

翌日彼が店を訪れた時に、その事を話しました。すると彼は「いつかは、お父さんにはお目にかかるつもりでしたが、自分には貴方を妻に頂く資格は何もないのです。貴方に苦労をおかけする事は目に見えていますので、貴方の方から嫌われるような事ばかりしていましたが、一日一度はお会いしたくてお店にお邪魔していました。」と話す

まの今のは全部してください。私は色々の縁談が来ていますが、全部私の一存でお断りしています。それを黙つて見ていてくれる父です。私も多少の苦労を経験していますので、私を信

用してくれているんだと思います。もし父がOKだった時は、

後のは叔父が何とか力になつ

てくれます。特攻精神で突入してください。」と私が言うと、「いやー、勇気が湧いてきました。

では、早速ですが明日十九時にお伺いしたいと思っていますが、よろしいですか。」と彼、「いい

も悪いもないのでしょ。来いと言つたのは父ですよ。」と私が言つたのは父ですね。心配ないんで

えば「貴方は見かけによらず強い人ですね。」「もしかして、男っぽい人ですね。心配ないんで

すか。」と彼、たわいもない話

りと覚えています。翌日になり

を、七十年を経た今でもはつきり立つたり、さかんに咳払いをしていました。叔父が「兄さ

ん、鬼が出るか蛇が出るか心配だね。」と言えば、「君は気にな

らんのかね。」と父の言葉に「いや気になってるさ、兄貴がどんな顔をするかをね。」と二人のやり取りの傍で母は心配この上もないといった顔で座つてました。

続く

(公財)海原会寄付者芳名簿  
(敬称略) (単位千円)

令和二年七月九日より

五 若月 良介(一般) 静岡

五 村木 良治(乙22) 大阪府

五 若林 武美(乙13) 富山

五 川村 修三(乙18) 兵庫

五 土井 勇(乙22) 東京

五 恵口 寛子(一般) 東京

三〇 鈴木 里可(一般) 茨城

三〇 金井 克己(乙10) 神奈川

三〇 猪俣 武博(乙6) 茨城

三〇 池田 隆(甲12) 群馬

一〇 谷口 繁(乙20) 埼玉

五 薄衣 岩雄(乙23) 埼玉

五 服部 義隆(甲16) 神奈川

五 医療社団リヨクエイカイ

一〇 堀端 優子(乙4) 神奈川

一〇 米倉 優子(乙4) 神奈川

誠に有難うございました。

「予科練」第46号 11・12月号  
昭和53年7月26日第3種郵便物認可

令和2年11月1日発行  
(隔月奇数月1回1日発行)

編集人 発行人

保坂俊雄 菅野寛也

発行所 140-0013

公益財團法人 海原会  
(大森コープビニアネーズ会)  
東京都品川区南大井6-16-12

FAX 03-3141-1377  
○○○ 3141-1377  
三三一  
一三三  
七七  
六六  
八八  
一五  
一四  
三三  
五五  
二一  
定価500円

## お墓

首都圏多数の霊園・寺院墓地を  
ご案内致します。

東京都・足立区  
舍人浄苑

0.90m<sup>2</sup>~

東京都より公益霊園の認証を  
受けた、舍人公園近くの都心  
でも希少な好環境の霊園。



東京都・港区  
高輪メモリア  
ルガーデン

0.45m<sup>2</sup>~

都心の緑あふれる閑静な住  
宅街の霊園。環境・価格ともに  
大好評の立地です。



東京都・町田市  
町田いずみ浄苑  
フォレストパーク

0.90m<sup>2</sup>~

緑豊かな武蔵野・横浜みなと  
みらいを一望し、四季折々の  
花が彩る好環境の霊園。



東京都・八王子市  
東京霊園



3.00m<sup>2</sup>~

四季のうつろいに永遠の時  
を刻む、行き届いた景観と  
設備の公園墓地。

海原会会員の皆様へは、墓石・葬儀(祭壇費用)・お仏壇を  
会員特別価格にてご提供させていただきます。お気軽にご相談ください。

お墓 墓所工事  
10%割引

お葬式 祭壇価格から  
20%割引

お仏壇 25%割引

お問合せは、  
海原会事務局へ

03-3768-3351

株式会社メモリアルアートの大野屋は  
甲飛十四期生 元海軍一等飛行兵曹 大澤靜雄の  
次男 大澤靜可の経営する、お墓・お葬式・お  
仏壇までご利用いただける会社です。



メモリアルアートの  
大野屋

大野屋テレホンセンター

葬儀のご依頼(緊急ダイヤル)24時間受付

「仏事・葬儀・お墓に関するご相談 (9:00~20:00)」

メモリアルアートの大野屋  
<http://www.ohnoya.co.jp>

0120-02-8888



全優石  
全国優良石材店